

## 日本語の再帰代名詞「自分」の先行詞の決定条件

生田 奈穂<sup>†</sup> 吉本 啓<sup>‡</sup>

東北大学大学院国際文化研究科

<sup>†</sup>ikuta@insc.tohoku.ac.jp <sup>‡</sup>kei@tiger.intcul.tohoku.ac.jp

### 1. はじめに

本稿では、照応表現である「自分」の先行詞がどのように決定されるのかについて考察する。Head-Driven Phrase Structure Grammar (Pollard and Sag 1994) を用いた Iida(1996)の枠組みを拡張し、Momoi(1985)の semantic role hierarchy を導入することによって、「自分」の束縛メカニズムを提案する。

### 2. 先行研究とその問題点

#### 2.1 標準束縛理論による分析

標準束縛理論(Chomsky 1981)によると、全ての NP は次の三つのタイプのうちのどれかに分類される。

- (1) a. anaphors (照応表現)
- b. pronominals (代名詞)
- c. referential - expressions (指示表現)

これら三つのタイプの分布は(2)の束縛条件によって制限されると仮定している。

- (2) a. Condition A: 照応表現はその局所領域内で束縛されなくてはならない。
- b. Condition B: 代名詞はその局所領域内で自由である。
- c. Condition C: 指示表現は自由でなければならない。

また、標準束縛理論のもとでは、 $\alpha$ は次の場合に、かつ次の場合のみ $\beta$ によって束縛される。

- (3) a.  $\alpha$ と $\beta$ が同一指標を持つ。
  - b.  $\beta$ が $\alpha$ をc-統御する。
  - c.  $\beta$ がA位置にある。
- その他の場合は $\alpha$ は自由である。

「自分」が局所的な束縛だけではなく長距離束

縛をも許すという事実は標準束縛理論にとっては解決の難しい問題である。「自分」が局所的に束縛される可能性は「自分」が Condition A に従うことを示しており、照応表現として分類されるべきであるといえる。一方で長距離束縛の可能性は「自分」が Condition B に従い、代名詞として分類されるべきであることを示しているといえる。標準束縛理論ではこの「自分」の逆説的な性質を十分に説明することができない。

#### 2.2 Disjunctive Theory

先行研究の多くは、「自分」の束縛は「disjunctive」なアプローチで説明されてきた。disjunctive なアプローチとは、次の二つの束縛のメカニズムが別々に仮定されていることを指す。一つ目は統語的な束縛のメカニズムのことで、このメカニズムでは常に主語を「自分」の先行詞としてとる。二つ目は談話に関する束縛のメカニズムで、このメカニズムではある談話の概念に基づいて通常主語以外を先行詞として決定する。この disjunctive theory の例として Kameyama(1985)が挙げられる。しかし、Iida(1996)はこのような disjunctive theory は文中に複数の「自分」が現れる場合に誤った予測をすると論じている。もし、syntactic binding と discourse binding という二つの独立したメカニズムが存在するのならば、二つの「自分」が別々の束縛のメカニズムによって許可された別々の先行詞をとることを阻止するものは何もない。

#### 2.3 久野(1978)の共感度分析

久野(1978)は描写されている状況を見る方法は共感の概念によって決定されると想定し、話者が視点を置こうとしている人間に共感していることが必要である。しかしこの分析では(4)の